

# 視聴覚メディア部会

## 第6学年 国語科学習指導案

指導者 こてはし台小学校 阿南 麻美子

第6学年 教科→国語・年間を通して書く力を育てる作文授業

使用したICT機器 電子黒板、プロジェクター、パソコン

<本指導の概要>

インターネット上の作文サイトを活用することで、作文の技術を知り技能を身に付けることができる。

### 1 教科

国語・年間を通して書く力を育てる作文授業

### 2 単元について

#### (1) 学習指導要領より

国語科の目標は以下のとおりである。

国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる。

国語科では次の能力を育成する。

- ①国語の適切な表現
- ②国語の正確な理解
- ③伝え合う力
- ④思考力や想像力及び言語感覚
- ⑤国語に対する関心
- ⑥国語を尊重する態度

本授業の中心になる作文は、「国語の適切な表現」の育成をねらっている。

「国語を適切に表現する能力」とは、国語を適切に使う能力と国語を使って内容や事柄を適切に表現する能力との両面の内容を含んでいる。

「国語を適切に使う能力」「国語を使って内容や事柄を適切に表現する能力」の2つが作文するときには必要である。これまで習ってきたことを活用する力が求められている。

児童は、これまでの六年間で、作文について様々な指導を受けてきたはずである。しかし、児童の作文の能力にはかなりの個人差がある。そこで、6年生であっても作文の書き方を一つ一つ指導していく必要がある。

学習指導要領の指導計画の作成と内容の取扱いの「B書くこと」に関する事項で次のように記載されている。(第5学年及び第6学年の部分のみ抜粋)

(4) 第5学年及び第6学年では年間55単位時間程度を配当すること。その際、実際に文章を書く活動をなるべく多くすること。

55単位時間をどのように配当すると、「国語を適切に表現する能力」をつけることができるのか。それは、継続していくことだ。国語の教科書にも作文単元がある。6年教育出版の教科書には、(上)「随

筆を書こう」(下)「意見文を書こう」という2つの単元しかない。その時間だけを使って作文の学習をしても、書く力を向上させるのは難しい。そこで、作文の指導を週に1回、年間通して行う。また、「実際に、文章を書く活動をなるべく多くすること」とあるので、授業の前半には、たくさんの例示を示して書き方の練習をする。後半には、習ったことを活用して作文する時間を確保する。そうすることで、習ったことを活用できているかを確認することができる。また、活用できていなかった場合には、例文を示したり、友達の作文を紹介したりすることで、習ったことを活用させるようにする。

このように、年間通して書く活動を取り入れることで、「国語の適切な表現力」を身につけられるようにすることを目指す。以下が年間計画である。

月	内容	資料、メディアなど
4月	<ul style="list-style-type: none"> <li>●長く書く               <ul style="list-style-type: none"> <li>①短い行動を作文にする。</li> <li>②思ったことや考えたことなどを入れるようにする。</li> </ul> </li> <li>●視写               <ul style="list-style-type: none"> <li>①10分間スピードチェック</li> </ul> </li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・視写教材</li> </ul>
5月	<ul style="list-style-type: none"> <li>●書き出しを工夫する(運動会のこと)               <ul style="list-style-type: none"> <li>①一番書きたいところから書き出す。</li> <li>②動きのある文で書き出す。</li> </ul> </li> <li>●しめくくりを工夫する(運動会のこと)               <ul style="list-style-type: none"> <li>①全体をまとめてしめくくる</li> <li>②問題を残してしめくくる</li> <li>③続きのある形でしめくくる</li> </ul> </li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・イラスト作文スキル(作文教材)(明治図書)</li> </ul>
6月	<ul style="list-style-type: none"> <li>●書き出しを工夫する(農山村留学)               <ul style="list-style-type: none"> <li>①一番書きたいところから書き出す。</li> <li>②動きのある文で書き出す。</li> </ul> </li> <li>●読書感想文               <ul style="list-style-type: none"> <li>①「山田式」読書感想文を書く。                   <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の体験と本の内容を取り入れながら書く。</li> <li>・感動したところを書く。</li> <li>・自分自身の意見を書く。</li> </ul> </li> </ul> </li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・イラスト作文スキル(作文教材)(明治図書)</li> </ul>
7月	<ul style="list-style-type: none"> <li>●書き出しを工夫する(ドッジボール大会)               <ul style="list-style-type: none"> <li>①一番書きたいところから書き出す。</li> <li>②動きのある文で書き出す。</li> </ul> </li> <li>●暑中見舞い・残暑見舞い               <ul style="list-style-type: none"> <li>①時期によって挨拶が異なることを知る。</li> <li>②適切な内容構成を知る。</li> <li>③自分が考えたことを書く。</li> </ul> </li> <li>●一文を短くする               <ul style="list-style-type: none"> <li>①長い文をいくつかの文に分けて書く。</li> <li>②分の主語を明確に書く。</li> <li>③一つの文で一つのことを述べる。</li> </ul> </li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・イラスト作文スキル</li> <li>・手紙の書き方テキスト</li> <li>・TOSSランドHP 東田昌樹氏の「作文技術指導WEBワーク」(電子黒板)</li> </ul>

<p>9月</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●助詞「は」「を」「へ」を正しく使う             <ul style="list-style-type: none"> <li>①いくつかの例文を正しく書き直す。</li> <li>②正しく使って作文する。</li> </ul> </li> <li>●視写             <ul style="list-style-type: none"> <li>①随筆文の視写（正しく作文用紙を使う）</li> </ul> </li> <li>●カギカッコの使い方             <ul style="list-style-type: none"> <li>①話しているときの使い方</li> <li>②思ったことや引用のときの使い方</li> </ul> </li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・TOS SランドHP 東田昌樹氏の「作文技術指導WEBワーク」（電子黒板）</li> </ul>
<p>10月</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●立場を変えてかく             <ul style="list-style-type: none"> <li>①誰の視点で書かれた文かを考える。</li> <li>②視点を変化させて書く。</li> </ul> </li> <li>●原稿用紙を正しく使ってかく             <ul style="list-style-type: none"> <li>①会話文を必ず使う。</li> <li>②原稿用紙を正しく使う。</li> </ul> </li> <li>●言葉の飾りを使って書く（擬人法）             <ul style="list-style-type: none"> <li>①直喩、暗喩について知る。</li> <li>②擬人法を使って表現する。</li> </ul> </li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・イラスト作文スキル（作文教材）（明治図書）</li> <li>・イラスト作文スキル（作文教材）（明治図書）</li> <li>・TOS SランドHP 東田昌樹氏の「作文技術指導WEBワーク」（電子黒板）</li> </ul>
<p>11月</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●つながりを工夫して書く（接続詞）             <ul style="list-style-type: none"> <li>①逆説、順接の文を書く</li> <li>②並列の文を書く</li> <li>③例示の文をかく</li> </ul> </li> <li>●詳しく長く書く（形容詞、会話文）             <ul style="list-style-type: none"> <li>①一つのことを詳しく書く。</li> <li>②形容詞・会話文を入れて書く。</li> </ul> </li> <li>●構成のはっきりした文章を書く【本時】             <ul style="list-style-type: none"> <li>①事実と意見の使い分けをして文章を書く。</li> </ul> </li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・TOS SランドHP 東田昌樹氏の「作文技術指導WEBワーク」（電子黒板）</li> <li>・TOS SランドHP 東田昌樹氏の「作文技術指導WEBワーク」（電子黒板）</li> <li>・TOS SランドHP 東田昌樹氏の「作文技術指導WEBワーク」（電子黒板）</li> </ul>
<p>12月</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●卒業文集             <ul style="list-style-type: none"> <li>①書き出しを工夫して書く。</li> </ul> </li> <li>●要約して書く（体言止め）             <ul style="list-style-type: none"> <li>①体言止めの使い方を知る</li> <li>②3つのキーワードを使って書く</li> <li>③体言止めで要約文を書く</li> </ul> </li> <li>●視写             <ul style="list-style-type: none"> <li>①10分間スピードチェック</li> </ul> </li> <li>●年賀状             <ul style="list-style-type: none"> <li>①場合によって挨拶が異なることを知る</li> <li>②適切な内容構成を知る</li> <li>③書式を整えて丁寧に書く</li> </ul> </li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・視写教材</li> <li>・手紙テキスト</li> </ul>

1月	●言葉の飾りを使って書く（比喻） ①比喻を使って言葉の意味を説明する	・TOSSランドHP 東田昌樹氏の「作文技術指導WEBワーク」（電子黒板）
2月	●構成を工夫して書く（起承転結） ①起承転結の構成を知る。 ②メモをつくる ③構成に気をつけて文章を書く。	・TOSSランドHP 東田昌樹氏の「作文技術指導WEBワーク」（電子黒板）
3月	●構成を工夫して書く（トピックセンテンス） 卒業論文の作成 ①段落の一文目にまとめの文を書く。 ②まとめの文を順序よく構成する。 ③段落の一文目で全体がわかるように書く。	

年間計画の中に入っている資料、メディアなどがどのような効果があるのかを以下に説明していく。

### ① 視写

教科書に作文の例示がされていることがある。その場面では、視写を行うことが多い。しかし、教科書は作文用紙のマス目と違っている場合があるので、低位の児童が混乱してしまうことがあった。では、どうしたらよかったのか。それは、教師がお手本を原稿用紙に書いて、印刷して渡せばよかったのだ。そうすれば、どの児童も熱中して取り組めるようになる。そうした配慮が少ないと、発達障がい児のことを放置してしまうことになる。

「うつしまるくん」という視写教材がある。この教材は、見本があるのが特徴だ。その教材に対して、熊本県子ども総合医療センター小児科医院長の山田みどりドクターは次のように評価している。

文節や文章をかたまりとして、まとめて覚えて写すやり方は訓練を行う時にもとても参考になる。自分で文を構成できない子ども（作文や日記、感想文などを書けない子）に、このやり方は、言い回しなどを覚えることができ、文章のパターンがつかみやすくなると考える。

視写を行うことで作文の力を育てることにつながると考えられる。

ときどき、十分間でどのくらいの文字数を視写できるのかを試すときがある。学年ごとに、達成すべき目安がある。（6年生の場合は360文字）それを達成するために、書く力というのを鍛えていく必要がある。我がクラスの実態は、4月の時点では6年生の目安を達成している児童が2名しかいなかった。11月は約7割に増えた。今後も視写の活動を取り入れていくことで、書く力を伸ばすことにつながると考える。

### ②イラスト作文スキル

低・中・高学年用の3冊あり、学習指導要領に対応していて、コピーして使える教材である。なお、指導案もついているので、どのように授業したらよいのかもすぐにわかる。この教材のよいところはタイトルにも書いてある通り、イラストが入っていることである。学校生活の様々な場面をイラストで表現している。イラストは、書くイメージを浮かばせることと、身につけさせたい観点をはっきりさせるためのものでもある。書くことが苦手な児童にとって、具体的なイメージを与え、書くことが得意な児童にとってはさらに豊かな力が発揮できるようになっている。

それぞれのページには、めあてが書かれている。例えば、「自己紹介を書こう」のページでは、めあ

て①主語と述語の正しい文を書ける。②敬体に統一して書ける。とある。めあてがはっきりとしていることで、そこだけの評価することができる。作文の技術は数え切れないほどたくさんある。指導しだすときりがないところだが、一度に指導すると、かえって何も残らなくなってしまうことの方が多い。そこで、この作文スキルでは、めあてに書いてあるところを重視して評価していくことで、一つずつ作文の技術を知り、技能を高めていくことになっていくだろう。

### ③作文指導と日記指導を並行する

また、一回の授業で全員の能力を定着させることは大変難しい。そこで、有効なのが、作文指導と日記指導を並行して行うことである。クラスで毎日日記の宿題を出している。日記は毎日見て、評定とコメントを書いている。評定はABCでつけている。観点は文の長さである。ノート1ページびっしり書いてきて「A」ノート半分が「B」ノート半分未満が「C」である。2ページ以上書いてきたときには、さらに「A」を増やして評定していく。児童は日記帳が配られると、評定とコメントを確認するために日記帳を開いている。評定やコメントがなかったときには、書いてもらいに來るほど楽しみにしている。

日記指導のときには、書いてある量を重視しているため、文や漢字の間違いなどは指摘しないことが多い。しかし、作文指導と日記指導を並行して行っていくときは日頃とは異なる。その日に作文指導で習った内容のみができていのかどうかをチェックするのだ。「習った内容のみをチェック」するところがポイントだ。人は一度にいくつものことを同時に直すことはできない。そこで、一つ一つ積み重ねていくために、一つだけを徹底して指導していくことで、児童は習ったことを生かして作文を書くようになるだろう。

## (2) 国語の適切な表現力を身につけられるようにするために

学習指導要領の第五及び第六学年の「書くこと」の目標は次の通りだ。

(2) 目的や意図に応じ、考えたことなどを文章全体の構成の効果を考えて文章に書く能力を身に付けさせるとともに、適切に書こうとする態度を育てる。

第6学年で最終的に身に付けさせたい力は「文章全体の構成の効果を考えて書く力」である。これができるようになるためには、第3及び第4学年での身に付けさせたい力の「段落相互の関係などに注意して文章を書く力」と第1及び第2学年で身に付けさせたい力の「簡単な構成を考えた文や文章を書く力」が必要である。しかし、児童の作文を見てみると、これまでに身に付けておくべきことが身に付いていない児童が多い。そこで、6年生であっても、これまでの内容をふり返り、一つずつ学習させていく必要性を感じる。

作文の一つ一つの技術は、学習指導要領の「(4) 伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の指導事項の中に載っている。各学年における言葉の特徴や決まりに関する事項が掲載されている。それを以下に引用する。

	第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
言葉の働きや特徴に関する事項	(ア) 言葉には事物の内容を示す働きや、経験したことを伝える働きがあることに気付くこと。 (イ) 音節と文字との関係やアクセントによる語の意味の	(ア) 言葉には、考えたことや思ったことを表す働きがあることに気付くこと。 (イ) 漢字と仮名を用いた表記などに関心をもつこと。	(ア) 話し言葉と書き言葉との違いに気付くこと。 (イ) 時間の経過による言葉の変化や世代による言葉の違いに気付くこと。

	違いなどに気付くこと。 (ウ)言葉には、意味による語句のまとまりがあることに気付くこと。		
表記に関する事項	(エ)長音、拗音、促音、撥音などの表記ができ、助詞の「は」、「へ」及び「を」を文の中で正しく使うこと。 (オ)句読点の打ち方や、かぎ(「」)の使い方を理解して文章の中で使うこと。	(ウ)送り仮名に注意して書き、また、活用についての意識をもつこと。 (エ)句読点を適切に打ち、また、段落の始め、会話の部分などの必要な箇所は行を改めて書くこと。	(ウ)送り仮名や仮名遣いに注意して正しく書くこと。
語句に関する事項		(オ)表現したり理解したりするために必要な語句を増し、また、語句には性質や役割の上で類別があることを理解すること。 (カ)表現したり理解したりするために必要な文字や語句について、辞書を利用して調べる方法を理解し、調べる習慣を付けること。	(エ)語句の構成、変化などについての理解を深め、また、語句の由来などに関心をもつこと。 (オ)文章の中での語句と語句との関係を理解すること。 (カ)語感、言葉の使い方に対する感覚などについて関心をもつこと。
文及び文章の構成に関する事項	(カ)文の中における主語と述語との関係に注意すること。	(キ)修飾と非修飾との関係など、文の構成について初歩的な理解をもつこと。 (ク)指示語や接続語が文と文とのつながりに果たす役割を理解し、使うこと。	(キ)文や文章にはいろいろな構成があることについて理解すること。
言葉遣いに関する事項	(キ)敬体で書かれた文章に慣れること。		(ク)日常よく使われる敬語の使い方に慣れること。
表現の工夫に関する事項			(ケ)比喩や反復などの表現の工夫に気付くこと。

6年間で、これだけたくさんの項目を指導して、定着させていく必要がある。およそ基本的な作文の技術は、低学年で習う。それを、中・高学年で活用できるようにする必要がある。しかし、高学年の段階でも、習ったことが理解できていない児童が多い。作文の技術は細かく、内容も多いからだと考えられる。

そこで、授業の中で、一つ一つを指導していく必要があると考えた。「実際に文章を書く活動をなるべく多く」するために、一時間の流れを工夫する必要がある。次のような流れで行っていく。

①学習内容を知る。(例示をいくつも取り上げる)

②学習内容を使った文をいくつも書く。(例示をもとに練習する)

### ③学習内容を使って作文をする。(作文用紙一枚程度)

このように授業を行っていくことで、一つずつ習ったことを積み重ねていくようにする。次の時間に別の学習内容を行ったときにも、習ったことを生かしていくように声をかけていく。そうすることで、一つ一つの学習内容を積み重ねていくことになるだろう。しかし、言うてすぐにできるようなことではない。そこで、「③学習内容を使って作文をする」ときに必ず評定を行う。(評定基準は、作文用紙を正しく使うことができているかどうか) それも、毎時間である。そうすることで、正しい作文用紙の使い方を指導することができる。しかし、それでも毎回同じような間違いをしてしまう児童がいる。だからこそ、年間を通して指導していく必要があるのだ。

## 3 子どもの実態

省略

## 4 仮説との関連

### 視聴覚部会主題

自ら解決できる力と 生きる力を育てるメディア教育

メディア教育を通して、「自ら解決する力」と「生きる力」を育てようというのが主題である。

それぞれを定義してみると次のようになる。

「自ら解決できる力」→自分自身でうまく処理する力、自分自身でうまく処理することを可能にするもの

「生きる力」→効果やはたらきをじゅうぶんに引き出すことを可能にするもの

(広辞苑参照)

「生きる力」は学習指導要領には下記のように書かれている。

(1) 自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力

(2) 自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性

(3) たくましく生きるための健康や体力

学習指導要領に載っている「生きる力」の(1)と視聴覚部会の主題の「自ら解決できる力」は同じような内容である。つまり、メディア教育を通して、自ら解決できる力を育てていくことが必要である。

### 【仮説】

それぞれの教育メディアの特性を生かして学習に活用すれば、情報活用能力が高まり、意欲的に学ぶ子が育つだろう。

「意欲的に学ぶ」とは…「積極的に学ぼうと思う気持ちにあふれている状態」のこと(広辞苑参照)だ。

この仮説の検証のために、次のことを提案する。

インターネットサイトを活用しながら、年間を通した作文の授業をすることで、児童が習ったことを積極的に生かして作文を書くことができる。

一年間を通して作文の技能の向上を目指していく。その中で必要に応じて、教育メディアを活用する。今回授業を行う国語科の作文の授業で「意欲的に学ぶ」ことを定義すると、

習ったことを活用して、作文を書こうとする。

となる。どのような状態になれば、児童が「習ったことを生かして作文を書こう」とするようになるの

だろうか。

次のように考え、定義づける。

**A. 習ったことがわかる**

**B. どんなときに使ったよいのかわかる**

次のような状態にするために、有効なのが「作文技術指導WEBワーク」である。以下に紹介する。

**(1) 作文技術指導WEBワーク**

T O S Sランド 東田昌樹氏が作成したサイトで、良さは以下の点だと考える。

- ①アニメーションがある。
- ②例文がたくさん出てくる。
- ③何度も練習できる。
- ④習ったことを生かして、作文を書ける。

作文の指導は、①模倣 ②練習 ③評定することが大切だと言われている。しかし、これまでの作文指導では、③評定だけを行い、①模倣②練習が圧倒的に少ない。それに、一度にいくつもの内容を評定するので、結局何も覚えられないでいるようだ。それでは、文章を書くのが苦手な児童は、いつまでたっても作文をすることができないのだ。

その点、このサイトを活用することで、たくさんの①模倣②練習をすることができる。一度に練習する内容が一つのことだけである。それを積み重ねていくことで、書く力がつくのである。また、指導案も同じサイト内にあるので、それをコピーしておけば、すぐに使える。パソコンをインターネットにつないで、大型テレビにつなぐか、プロジェクターでスクリーンに投影すれば、すぐに使える。

本授業では、プロジェクターで投影して、電子黒板を使う。電子黒板だと児童と対面した状態で、授業を行うことができる。また、分からない児童などをすぐに見つけられる。また、直接書き込むこともできるので、作文用紙などのマス目を指導したいときにも有効である。大型テレビの場合は、手元のパソコンでの操作になるため、児童を見ながら授業できないときがあったり、部屋の光の当たり具合で反射したりすることもあるので、デメリットが目立つ。

このサイトを使って26項目を指導することができる。低・中・高学年ごとに指導内容が分かれているが、児童の実態に応じて、どの学年の部分でも指導可能である。

どのサイトも、次のような構成になっている。

**① 例示 ② 例文 ③ 練習 ④ 作文**

いくつかの例示、例文が出てくることで、何度も練習することができる。

最後には、それを生かして作文することができるので、その時間内で習った内容を何度も書いて覚えていくことができる。

低学年からOK

- 1 「ん」を正しく使って書こう
- 2 「のぼす音」を正しく使って書こう
- 3 小さい「っ」を正しく使って書こう
- 4 小さい「ゃ」「ゅ」「ょ」を正しく使って書こう
- 5 くっぎの「は」「を」「へ」を正しく使って書こう
- 6 句読点を正しく使って書こう
- 7 かたかなを正しく使って書こう
- 8 会話文の「は」を正しく使って書こう
- 9 ていねいなことばの文を書こう

中学年からOK

- 10 常体の文を書こう
- 11 いろいろなかぎの使い方を覚えて書こう
- 12 主語と述語の関係を正しく使って書こう
- 13 符号を正しく使って書こう
- 14 修飾語を正しく使って書こう
- 15 指示語を正しく使って書こう
- 16 接続語を正しく使って書こう
- 17 一文を長く書こう
- 18 段落分けを正しく使って書こう

高学年からOK

- 19 構成のしっかりした文章を書こう(その1)はじめなかおわり
- 20 構成のしっかりした文章を書こう(その2)事実と意見の書き分け

**「レトリックを使った文」**

- 21 「リフレイン」を使って書こう
- 22 「対句」を使って書こう
- 23 「体言止め」を使って書こう
- 24 「倒置法」を使って書こう
- 25 「比喩」を使って書こう
- 26 「擬人法」を使って書こう

...




## 5 本時の指導

### (1) 目標

- ・事実と意見を分けて文章を書くことができる。(技能)

### (2) 展開

学習活動	(・) 教師の支援、留意点 (◎) 評価	PC使用
<p>1. 辞書引き</p> <p>2. 「話す聞くスキル」を使って音読をする。</p> <p>3. 作文</p> <p>(1) WEB作文ワーク「構成のはっきりした文章を書こう」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・文の音読</li> <li>・事実と意見の違いを見つける。</li> </ul> <p>(2) めあてを知る</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・言葉の意味を調べることができる。</li> <li>・スキルを持って音読させる。</li> <li>・姿勢を正して音読させる。</li> <li>・声がよく出ている児童を称賛する。</li> <li>・しっかり声が出ている児童を称賛する。</li> <li>・どんな工夫があるか、隣同士で相談させる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・TOSSランドHP 東田昌樹氏の「作文技術指導WEBワーク」(電子黒板)</li> </ul>
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">事実と意見を分けて作文しよう</div>		
<p>(3) 擬人法の例示・練習</p> <div style="display: flex; align-items: center;">  <div style="text-align: center;"> <p>②もうすぐ発表会があるのだろう。</p> <p>①男の人がトランペットをふいている。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> <p>どちらが事実？ どちらが意見？</p> </div> </div> </div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ノートどっちが事実か意見かを考える。</li> </ul> <p>(4) 作文をかく</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・題材を決めて作文をかく。</li> </ul> <p>3. 評価、評定</p> <p>(1) 教師に見せる</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・間違っていたところを直す。</li> </ul> <p>(2) 友達同士で読み合い、感想を書く</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・事実と意見の違いに気づかせる。</li> <li>・事実と意見の違いを考えさせる。</li> <li>・わからない場合は隣同士で相談するように促す。</li> <li>◎事実と意見の違いに気づき、どのような違いがあるのかを考えることができる。</li> <li>・書く内容が思い浮かばない子がいたときのために、いくつか例示をする。</li> <li>・作文用紙が正しく使えているかどうかを評定する。</li> <li>・友達のよいところを作文用紙の裏に書かせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・TOSSランドHP 東田昌樹氏の「作文技術指導WEBワーク」(電子黒板)</li> </ul>